

## 書評 小池誠著『東インドネシアの家社会 -- スンバの親族と儀礼』

著者	清水 昭俊
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	48
号	2
ページ	77-80
発行年	2007-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007388">http://hdl.handle.net/2344/00007388</a>

小池誠著

『東インドネシアの家社会  
スンバの親族と儀礼』

晃洋書房 2005年 xii + 281ページ

しみず あき とし  
清水 昭 俊

本書はインドネシア東部スンバ島の村落社会を対象とした民族誌である。社会人類学の民族誌の常として、対象社会を記述するとともに、理論的貢献をも意図している。民族誌記述の諸章（第1章～第8章）では一連の儀礼に焦点を当てて、スンバ社会に特徴的な「家」と「家社会」を描き出している。この2つの概念はこの研究のために著者が導入したものであり、序章と終章で理論的考察を行って、「家」を一般概念として洗練しようとする。

著者は1985年以来スンバ調査を行っていて、研究成果は逐次、学会誌などに発表していた。著者のスンバ研究のうち、当初のテーマだった親族についてまとめたのが本書であり、既発表の論文を収録しつつ、理論的骨格を改めて整理し、その骨格に沿って全体を書き改めている。私の研究地域はインドネシアではないので、本書との接点は理論の方にある。その観点で本書を見れば、現在の社会人類学における親族研究の状況をにらみつつ、そこに新たな刺激を投じて活性化しようとする研究書である。

まず初めに、次の目次に従って本書の内容を見ていこう。

序 章 「家」とは何か

第1章 スンバの歴史と社会

第2章 中核村ウンガの成り立ち

第3章 建築物としての「家」

第4章 「家」の系譜的構成

第5章 「家」と婚姻

第6章 「家」と人生儀礼

第7章 大祭 儀礼的プロセス

第8章 大祭と「家」の政治学 儀礼から戦略へ

終 章 「家」の比較研究に向けて

著者は1980年代のスンバ社会から、日本語で「クニ」と訳した地域単位を選択し、その範囲でひとまとまりの統合を示す社会生活、つまり「大祭」と総称される一連の儀礼を観察した。クニの中心が中核村であり、大祭は中核村を主舞台として実施される。著者が調査したのはスンバ島東部の、ウンガという集落を中核村とするクニだった。

クニと中核村はともに慣習的な地域単位であり、国家の行政制度に採用されることなく、人々が自律的に維持してきた。第1章、第2章によれば、クニはかつて政治的に自立していた時期もあったが、歴史を経て、現代では地方行政でも地方経済でも重要度は低く、クニ内の住民を統合すべき大祭は、調査時にすでに時代の変化に遅れをとっていた。著者が1986年に観察した大祭は、中核村ウンガで大規模に実施された最後の大祭だった。しかし、大祭は著者に、「家」と「家社会」の特徴を理解する得がたい機会を提供した。

著者が自省的に述べるように、このような消え去る文化的「伝統」への関心は、今日の社会人類学ではすでに衰退した研究「伝統」である。しかし、社会人類学はこの「伝統」とともに、社会の構造と機能、とりわけ親族に対する関心を失っていった。本書には、新たな視角のもとに親族研究を活性化したいという著者の熱意を読み取ることができる。

第1章、第2章、第7章によれば、ウンガは13戸の家屋からなる集落であるが、普段は留守役のみがいる家が多く、住人の過半は経済的利便のよい集落に生活の拠点を移して、中核村は儀礼の場として維持されていた。現存の13戸のほかに、今は家屋がない家が7戸あり、人々はこれを合わせて、中核村

は20戸の家で構成されると認識しているという。

ここでいう「大祭」は4年ごとに訪れる儀礼の時期である。そのスケジュールは、順次13戸の家々に場を移して、3つないし7つの儀礼を行っていく形で編成される。各家では、家（家屋）に祭られている祖先に対し儀礼を行うほかに、家によっては中核村の祭祀場での儀礼を分担する。中核村の首長や祭司など、儀礼のための諸役は特定の家々に固定的に割り当てられている。儀礼は個々の家で行われても、中核村の諸役が参与するのであり、多かれ少なかれ共同体の儀礼という性格を帯びている。第7章が詳述する1986年の大祭では、5月から準備が始まり、10月24日から12月2日まで、ほぼ連日儀礼が行われた。人々は別の集落での普段の生活を中断して、中核村での儀礼に従事する。投入する時間と労力、祭宴に供する多数の馬などの財物は、当事者に大きな負担であることが了解される。

大祭について述べた上の簡単な文章にも、家の複雑さが反映している。儀礼を順次分担して行うのは、13戸の家々であるが、大祭の儀礼で祭られるのは20戸の家の祖先である。このような家の微妙なあり方を分析する用具として、著者は序章の考察で、「イデオロギーとしての家」と「集団としての家」という区別を導入していた。調査当時、中核村ウंगाには13戸の（集団としての）家があったが、儀礼的役割を分担し、その任を担うのは、中核村の正規のメンバーである20戸の（イデオロギーとしての）家である。

家の成員構成は複雑であり、単純な原則によって描くことはできない。家の構成を述べるには、もうひとつの親族集団である氏族を考慮に入れる必要がある。その氏族も単純ではない。一例をあげれば、子どもは父系出自に従って父親の氏族に属すが、氏族の構成はさらに複合的であり、貴族層の氏族は主メンバーの父系系統のほかに、奴隷の父系系統を内包している。両者の間に親族関係はないが、ともに同じ氏族の構成員であるという。

この氏族を母体として家が構成されるが、両者の関係も複雑である。中核村ウंगाの世襲首長を出す支配的氏族は3戸の家を持ち、氏族の成員をこの3

戸の家に割り振って所属させている。この割り振りを氏族内部で調整して変更することもある。他方で、生きた成員のいない家でも、祖先をよりどころとして（イデオロギーとしての）家は存続する。この場合、祖先（神器）は別の（集団としての）家が預かる。つまり、外見上は一戸の（集団としての）家でありながら、複数の（イデオロギーとしての）家が所在する家がある。この場合、人々はコンテクストに応じて、一戸の家とも複数の家とも認識している。成員のいない（イデオロギーとしての）家であっても、分担している儀礼的役割は果たす義務があり、儀礼に際しては、母体である氏族が人員を派遣して、その役割を実行する。

書評の限られた紙数では、これ以上詳しく説明できないが、スンバの家の複雑な一端は示しえただろう。第4章と第8章で著者は、中核村ウंगाの家々について、家と氏族との、また家の複数の位相既述の2つに加えて著者は「アクショングループとしての家」という第三の位相を区別している間の錯綜した関係を「解きほぐして」いる。

著者が本書で記述するのは、「中核村を主舞台として行われるクニの大祭」のコンテクストに登場する家である。人々は日常の生活を中核村とは別の集落で営んでいる。著者によれば、この中核村以外の場での家は、大祭のコンテクストに現れる家と同一ではない。しかし、著者は日常の場での家にも拡張して「家」概念を構想しており、その視野で家と生活とのかかわりを観察して、「家」概念をさらに内容の豊かなものにしていく。

著者は、日本語のイエと同じく、（集団としての）家と（住居としての）家との重なりを重視し、「家」概念の不可欠な条件としている（ただし私にはこの条件の根拠を読み取れなかった）。第3章では「大きな家」と呼ばれる伝統的様式の家屋について述べている。この家屋は象徴的意味に富み、その解読には構造論的な分析が有効である。住人の生活する高床式の床面と、祖先の座する天井裏、床面の間仕切りなどの空間区分は、上 - 下、左 - 右、前 - 後、男 - 女、公的 - 私的、聖 - 俗などの価値づけがともない、家の生活の社会的空間的な広がりや秩序を表現してい

る。さらに第5章、第6章ではそれぞれ、婚姻（というよりむしろ縁組）と人生儀礼（婚儀と葬儀）を家との関連で記述している。

民族誌的記述を締めくくる第8章は、中核村ウンガとそこでの儀礼を、より広域の視野で同時代の社会変化の中に位置づけている。著者は、中核村の儀礼的秩序が権威を失い、第2位の地位にある家が、経済と地方政治でむしろ首長に優る勢力を発揮し、首長の儀礼的権威から離脱しようとする姿を、ブルデュエの「戦略」概念を使って描いている。

著者は、東スンバの中核村とクニを対象とした大略以上のような記述を通して、「家」と「家社会」の概念を提示しようとした。次には、人類学における親族研究の歴史を念頭に置きながら、著者の考察を検討していこう。

社会人類学で一世を風靡した構造機能主義は、アフリカにモデルを求めて、親族に関する概念と理論を整備した。しかし、東南アジア、オセアニア、日本などからは、アフリカ・モデルの親族理論に合致しない事例が知られており、それぞれの事例に即して、理論の再検討が1960年代から始まっていた。ここで説明を簡略にするために、単純な親族原則に還元しうるアフリカ・モデルに対して、単純な原則に還元しえない親族形態を、一括して「複雑な」と形容すれば、親族理論が「複雑な」諸形態に取り組み始めた時点で、社会人類学は親族への関心を失ってしまった。親族研究は現在でも低調であり、比較的活発に行われているのは、東アジアなど出自理論が有効な一部の地域に限られている。

その意味で、「家」概念を梃子に親族理論に踏み込んだ本書は、理論的な空白状態にある「複雑な」諸事例に対する関心を、改めて喚起するものであり、親族研究を活性化させると期待される。本書の描くスンバの家の複雑な諸相は、理論的思考の意欲を十分にかき立ててくれる。本書は儀礼における家を扱っているが、本書の要所で関連して述べているように、スンバの人々は政治経済の変化に家を維持し

ながら適応しようとしていた。同じように、現在でも「家」概念が有効である地域は少なくないだろう。

他方で、本書に疑問がない訳ではない。著者は「複雑な」親族事例を扱った諸理論の中で、北米などの事例から構想したレヴィ＝ストロース（以下、L-Sと略）の「家」論と、後続の人類学者が積み重ねてきた民族誌での「家」の使用例を参照して、「家」概念を練り上げている。しかし残念なことに、「家」について著者自身の定義を与えていない。本書の内容を総合すれば、象徴的意味に富む家屋を共同生活の基盤とし、祖先祭祀、人生儀礼、縁組、家計、地域の社会生活など、多方面の生活を総合的に組織する単位となる、そのような集団を「家」と呼んでいると理解される。家は祖先と子孫から構成され、日常の生活では、生きた成員による「集団としての家」が機能する。儀礼と祖先祭祀のコンテキストでは、祖先が「イデオロギーとしての家」を体現する。そして、「集団としての家」を満たすべき生きた成員がいなくとも、祖先（神器）の存在が「イデオロギーとしての家」の存続を保証する。このような多元的かつ総合的な生活の容器であるがゆえに、成員構成は一定の親族原則に従いながらも、親族以外の要因が作用して、「複雑な」様相を呈する。

著者は文中でも書名でも「家社会」の語を用いているが、この概念についてもそれとして説明していない。文脈から判断して、「家社会」は「家」の対概念であり、社会関係が家を単位とし家間関係として構成されているような社会を指していることが了解される。しかし、本書の描くスンバの事例については、「家」と「家社会」の間に距離があると思われる。一例をあげれば、中核村ウンガの支配的氏族の場合、3戸の家からなるとはいえ、各家の行動は氏族の長である中核村首長が統括していた。この氏族では、大祭にかかわる行動主体は、家ではなく氏族である。社会関係の構成単位として、氏族が（あるいは氏族も）重要であることになる。この点を反映してであろうが、ウンガの成員構成を説明する第4章は、家ごとではなく、氏族ごとに節を分けて、所属する家々を説明している。中核村とクニを「家社会」と見なすのは、氏族の重要性を看過すること

になる。

氏族と家の関係は、中核村に家屋と成員を持たない家の場合、さらに複雑である。一戸の家屋に複数の家と氏族が輻輳している事例、つまり祖先のみの(イデオロギーとしての)家と、生きた成員のいる家とが共存している家については、氏族と家、イデオロギーとしての家と集団としての家、それぞれの相互関係を述べる文章が入り組んでいて、よく読み取れない事例もあった(たとえばパホーカ氏族とパホーカの家)。「氏族」と「家」のほかに、「家の分節」という表現も説明なく使われていて、氏族と家には、著者がなお説明しきっていない複雑な様相があるという印象である。

著者は序章で私の見解も参照しているのだから、その立場からコメントを述べて、締めくくりとしたい。すでに述べたように、著者は「家」の考察をL-Sの議論から出発させる。本書が「家」の定義として示す唯一のものは、L-Sの「定義」である。しかし、それはごく包括的な条件を短く並べた文章であって、「家」の「定義」といえるものか、疑問である。さらに、著者はスンバ社会の2つの親族組織について、一方には古典的な「氏族」を当て、もう一方に著者の概念である「家」を当てた。

しかし、著者も引用しているように、私の観点からは、スンバの家も氏族も、ともに「家」の概念で捉えるのが適切である。本書の著者と私との見方の違いは、L-Sの「家」論の評価にかかっている。L-Sは「複雑な」親族組織のひとつとして「家」を見出し、「単純な」アフリカ・モデルの出自理論が当てはまる社会類型とは異なる社会類型として、「家社会」を構想した。しかし、私の理解では、L-Sが「家」の定義で列挙した「複雑な」特徴はいずれも、アフリカ・モデルの出自理論が依拠した諸事例にも見られるものばかりだった。この理論が参照し

た事例自体は「複雑」であり、理論はそれを過度に単純化して捉えていたのである。「複雑な」形態を対比的に識別させるべき「単純な」形態は、そもそもが存在しなかった。

そうならば、著者に「家」概念の必要性を認識させたスンバの家の諸特徴は、著者による限定、あるいはL-Sによる限定を超えて、親族集団に広く一般に観察されることになる。著者が「氏族」の語を当てたスンバの事例も、その意味できわめて「家」的である。著者の引用している範囲で述べれば、著者が私の見方とともに退けている「リニージこそ『家』である」とするCarstenとHugh-Jonesの見方を、より重視すべきだったと思う。

「単純な」アフリカ・モデルの出自集団からは区別すべきだとする著者の「家」論は、この区別ゆえに、研究の視野を必要以上に限定することになる。その一例として、著者が「家」概念の条件とする家屋との重なりを検討してみたい。先に触れたように、著者はその根拠を述べていない。終章で、「家」をキー概念とした比較研究の可能性を、トラジャ(スラウェシ)、タナ・アイ(フローレス)および日本の事例に言及して述べている。いずれも家屋と家が重なる事例である。しかし、スンバの家のような「複雑な」親族事例で、何らかの物的存在が、スンバの家における家屋のように、集団の統合的象徴となっているような例は、広く見出される。たとえば、マーシャルでは一筆ごとの土地、ヤップでは家屋の基壇、ペラウでは共同体集会所の席、メリナでは墓が、それぞれ「家」と呼びうる集団の物的象徴となっている。家屋との重なり重視は、これらの類例を外し、比較研究の視野を狭く限定してしまうと思われる。

(国立民族学博物館名誉教授)